昨年度の「学級状況調査」で現場の実態と齟齬が見られる項目の再調査を通して、学級・学校経営上の課題を明確化すると共に長期休業後の学校再開後の変化について考える

増田　修治・井上　恵子*

研究実績の概要

【概要】「現代の教育課題と With コロナ時代の教育課題の分析と今後の方向性」

子どもたちに対しての教員の意識調査をしたところ、1998 年度と 2019 年度では、大きく様変わりしていることがわかり、「静かな荒れ」と言われる状況が生まれてきていることが分かった。

2020 年度は、それに引き続いての調査・研究である。第一部の「学級･学校状況調査」では､「職員間の仲の良さ」「子どもの様子」「親の学校の協力度」「管理職のあり方」「子ども同士のつながり」「暴力行為の増加への意識」「学級経営の困難さの度合いと経験」などについて調査をした。

その結果として､「職員間の仲が良い」では､「保護者や子どものことを話せる」というのが 56% を占めていた。管理職のリーダーシップについては「問題を積極的に解決してくれる」「困った時に、力になってくれたり、アドバイスをしてくれる」が共に 30% となったおり、教員が求める管理職像が「問題が起きた時に力になってくれ、解決してくれたり、アドバイスをしてくれる」というのが好ましい管理職像であることが分かった。

「子ども同時の暴言や暴力」については、「よく見られる 6.9%、時々見られる 62.4%」で、両方合わせると 7 割近くの教師が子ども同士の暴言や暴力を目にしていることが分かる。

この「学級状況調査」で特に気になったのが､「暴力行為が増えた理由は、どこにあると考えるか」の設問結果である。「その子の特性が関係している」と答えた教員が､57.4%と 6 割近くある。また、「どのような時に先生に暴言や暴力をふるうか」の質問では、無回答が 53.6%だが、「子どもの特性が原因の時」と答えた教員が 17.9%と、無回答を除くとトップの原因としてあげている。

「学級経営が困難になった経験」があると答えた教員が、52.4%と過半数を超えており、その原因のトップは「教師の責任」と答えた割合が、16.6%であった。

暴力行為の増加の原因が、その子の特性にあったとしても、それがダイレクトに学級経営の困難さにつながっているとは言えないことが見てとれる。

しかしながら、「その子の特性」が学級経営の大変さの一因になっていることは確かであった。

長期休校後の状況調査では、「三密対策のため、多忙になった」が 57.4%、「給食の配膳、エアコンのクリーナー掃除、トイレ掃除などの仕事が増えた。」が 54.9%と、勤務内容以外の仕事が増えた様子が見てとれる。

どちらにしても、With コロナ時代の教育がこれからも続くことを考えると、教員の仕事が大変であることが続くであろう。授業に集中できる環境を整備することが、急務であることは言うまでもない。

＊嘱託研究員